

「傷痍軍人」考 ——大島渚監督「忘れられた皇軍」を通して——

Consideration of “Disabled Veterans” : with Special Reference to TV Program “Wasurerareta Kogun (Forgotten Empire’s Force)”

溝口 元*
Hazime Mizoguchi

はじめに

「戦後二十余年、我々傷痍軍人は一般社会から忘れられた感が強い、世相は過去の傷痍軍人と身障者との立場を変えて、身障の行事は新聞にも書き立てられるが、我々傷痍軍人のことは一行だに書かれない、現在の我々の立場から見れば、廂を貸して主家を取られた形であると思う」（塩野，1967）とは、埼玉県傷痍軍人会の結成に尽力した方の悲嘆ともいえるべき感想である。

まさに、1945年8月15日の敗戦を機に、「それまで常識とされていたものが非常識になり、非常識だったものが常識」となり、「悪とされていた自由主義や民主主義、社会主義は美德となり、軍国主義、封建主義、ご主人のためなら腹を切るということは一転して、ばかばかしく陳腐なことに変わ」（美輪，2015）だったのであった。

もうひとつ。「眼なし」「手足なし」「戦なし」「補償なし」と墨書した横断幕。幕の前には、軍帽を被り、黒メガネ、右手は義手、腫れた口元で白衣姿の男性が立っている。強烈なメッセージである。「元日本軍在日韓国人傷痍軍人会」の文字もみえる。1963年8月16日、大島渚（1932-2013）が監督を務め日本テレビで放映されたドキュメンタリー「忘れられた皇軍」の1シーンである。この場面は、「清算されない歴史を問う 日本人として駆り出された在日旧植民地出身者に戦後補償を」と題した「在日の戦後補償を求める会」のパンフレットにも使われた。なお2014年1月12日には、同テレビ局で再放送された。

戦時中は「白衣の勇士」、戦後は「白衣募金者」ともいわれた傷痍軍人は、じつに多くの問題群をわれわれに突きつける。国家により徴用され戦争という国家的行為により障害者になったこと、そのため国家による支援が種々考えられたこと、たとえば、恩給制度、社会復帰としての職業教育、就労支援などである。戦後の障害者福祉法制定の背景や障害者スポーツの端緒でもある。また、これらから外されてしまった「朝鮮人日本兵」の方々の処遇の問題もある。まさに、日本の現代史、戦後の日本を映し出す鏡そのものと云っても過言でないと思

* 立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：傷痍軍人、「忘れられた皇軍」、障害者福祉法、軍人恩給、障害者観

う程である。

本稿は、この傷痍軍人を主題的に取り上げる。戦時中は「白衣の勇士」、戦後は「白衣募金者」と呼ばれた状況からは当時のわが国の障害（者）観、敗戦後の傷痍軍人の当事者運動から障害者福祉法成立過程では、社会福祉の歴史的場面ばかりでなく現代史に向き合う題材として、また福祉教材としても極めて適切と思われる。存命の当事者が数少なくなり、実際に街頭等で傷痍軍人の行動を明瞭に記憶している人も大半は60歳を超えていると推定される今日だからこそ、傷痍軍人を改めて知る、考えることは有意義と思う。

1. 「傷痍軍人」とは誰か

「傷痍軍人」は定義そのものが容易ではない。「廃兵」や「傷兵」と呼ばれていた時期もあり、傷痍軍人の呼称が定着するのは1932年の「傷痍軍人特別扶助令」が公布された頃からと捉えられる。「傷痍軍人の職業保護に関するもっともまとまった図書」（山田，1997）と評される神奈川県職業技師牧村進と軍事保護院技師辻村康男による『傷痍軍人労務補導』（牧村・辻村，1942）では「第一章 序説 第一節 傷痍軍人の定義」と定義を真っ先に掲げている。「傷痍軍人と云ふ言葉は日常語では戦争で負傷した軍人と云ふ程の意味で使はれて居る」から始まる。また、この書の改訂版と捉えられる敗戦直前に出版された『新版 傷痍軍人勤労補導』（牧村・辻村，1944）では、「傷痍軍人と言ふ言葉は日常語では戦争で負傷した軍人といふ程の意味に理解されてゐる」である。しかし、戦傷病者を援護する法規からは実に込み入っていることが窺われる。概略は次のようである。

太田（1943）の『傷痍軍人提要』の「第一 傷痍軍人トハ」によれば、「傷痍軍人トハ戦闘若ハ公務ノタメ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ夫ガタメ恩給法ニ依リ増加恩給、傷痍年金、若ハ傷病賜金ヲ受クル者又ハ受ル見込確實ナ者即一等症ニシテ項款目症ノ者又其見込確實ナ者ニ限ル」である。なお、本書では、治癒や退院したり、症状の程度が比較的軽い「傷病軍人」と「傷痍軍人」を区別するよう注意している。

さて、軍人として公務のため傷痍を受けるあるいは疾病に罹ると「軍人傷痍記章」（1913年、「軍人傷痍記章条例」公布）を受ける。これが「恩給法」（1890年、「軍人恩給法」公布）の適用の基になるものである。しかし、ここでまた「軍人」とは何を指すかの定義問題が出てくる。さて、この軍人傷痍記章授与されるための書類として「軍人傷痍記章授与願」がある。記入例をみると階級、氏名、生年月日に次いで、「傷病ノ起因及症状」を記載する欄がある。「何々戦役（事変）ニ於テ何年何月何日何地攻撃ノ際右脛部ノ骨折銃創ヲ受ケ遂ニ膝関節以下ヲ切断シ（公務ノ為何病ニ罹リ何々ノ機能障碍ヲ貽シ）何年何月何日兵役免除目下義足ヲ用ヒ歩行ニ支障ナシ云々」と述べられている。義足の使用から歩行に支障をなくし軍人として原隊復帰ないし、障害の程度によっては除隊して職業訓練さらに就労への途が窺われ興味深い。

次に筆者の勤務先の所在地、埼玉県さらに熊谷市の傷痍軍人についてみてみよう。埼玉県

では、1938年に下賜金があり、『傷痍軍人保護制度概要 埼玉県』が作成されている。内務官僚出身の官選知事、土岐銀次郎（1894－1976）が「埼玉県告諭第四号 畏クモ 天皇陛下ニハ今次事変発生以来特ニ傷痍軍人軍人遺族家族ノ上ニ深ク 大御心ヲ注カセラレ本月三日内閣総理大臣ニ対シ優渥ナル 勅語ヲ下シ給ヒ且軍人援護ノ賛トシテ 御内金下賜ノ恩命ヲ垂レサセ給フ……」と述べている。

さらに「大日本傷痍軍人会埼玉県支部事業計画」が載せられている。一、傷痍軍人身上相談ニ関スル事業、二、会員ノ人格陶冶ニ関スル事業、三、相互融和ニ関する事業、四、其ノ他、である。傷痍軍人相談所は、浦和市の日本赤十字社埼玉支部内に、その支所が川越市の川越市役所内と熊谷市の熊谷市役所内にそれぞれ設けられた。熊谷支所の管轄は当時の秩父郡、児玉郡、大里郡、北埼玉郡、熊谷市であった。

その熊谷市には傷痍軍人会の記録がある。『創立30周年記念誌 戦傷』（1985）である。熊谷市の傷痍軍人会は1955年10月15日に設立されたのだが、その前史として1952年11月16日、日本傷痍軍人会第1回設立準備委員会が東京で開かれたことを受け、翌1953年3月28日、埼玉県身体障害者福祉会に戦傷者部会が結成されたことに遡る。当時会員は2665名であったが、1985年では約1900名。熊谷支部でも同期間151名から71名になってしまったと述べられている。

もとはといえば、1936年2月、軍事保護院の指導下、「大日本傷痍軍人会」が設立された。しかし、敗戦とともに1946年3月解散となった。財団法人として認可されたのは1961年3月のことであった。この財団法人埼玉県傷痍軍人会では、1995年の敗戦50年に当たる年に『終戦五十年記念誌』および『終戦五十年記念誌 想いあらたに』を刊行している。その間の1978年10月には高さ4メートルの「埼玉県傷痍軍人の塔」がさいたま市に建立された。これに関してもその15周年記念誌が刊行されている。

2. TV ドキュメント番組「忘れられた皇軍」

さて、本稿副題に示した「忘れられ皇軍」とは、1963年8月16日、日本テレビ「ノンフィクション劇場」の番組として放映されたテレビドキュメンタリーである。22時45分から23時15分の時間帯で、番組提供は東京ガス。監督・脚本・演出を映画監督の大島渚が担当した。プロデュースは、同テレビ局随一と云われた牛山純一（1930－1997）が務めた。なお、この番組は、2014年1月12日に「NNN ドキュメント '14反骨のドキュメンタリスト～大島渚『忘れられた皇軍』という衝撃」と題して再放送された。若干セリフで異なり箇所があるものの脚本自体は、大島渚の著作（大島、1966）に含まれている。「忘れられた皇軍」の仮題は「元日本軍韓国人」だったようである。「在日韓人歴史資料館」には大島渚監督が使用したと思われる台本が寄贈されているが、それには縦書きの「元日本軍韓国人」が線で消され横に「忘れられた皇軍」と加筆されていた。

ストーリーは、第二次世界大戦中、軍属として海軍に徴用されトラック島で負傷した朝鮮半島出身の徐洛源が主人公である。1944年2月17、18日の陸上、海上合わせて戦死者が7000

名を超える戦闘に参戦していたと思われる。こうした戦地・戦場には1938年1月に公布された「朝鮮人特別志願令」に基づいて赴いた朝鮮人兵士の他、軍属がいた。「朝鮮人日本兵」などといわれる存在である。数値は文献によって異なるが第二次世界大戦中、1万人台から2万人台の戦死者が出ている。さらに「生還した朝鮮人のなかには、爆撃で腕を失った者、作業中に脚を切断した者など、傷痍軍人となった者は少なくない」「眼のない目から涙あふれる在日コリアンの傷痍軍人の姿は、日本の戦後処理のずさんさを悲しいまでに浮き彫りにした」(朴, 2005) という捉え方がある。なお、呼称として、在日韓国人、在日朝鮮人、在住朝鮮人等々、どのように呼べば正確・厳密になるのかについては、それ自体を問題化した論考(愼, 2015)に委ねここでは「在日コリアン」と呼んでおく。

さて、この「忘れられ皇軍」を主題的に扱った論考は、国立国会図書館の文献検索データベースNDL-OPACによれば再放送の前に1件、再放送後に2件みられる。ストーリーを補いながら順を追ってみたい。

アジア政治史を専攻する遠藤(2014)は、「忘れられた皇軍」が問いたすもの—日本が忘れ去ろうとしている「償い」において、上野公園で傷痍軍人を目の当たりにした自身の体験の次に「夏の電車の中、戦闘帽を被り、黒いサングラスをかけた男のアップから本篇は始まる」という形でストーリーを扱っている。映像は湘南電車の車内で、右腕切断で義手。両眼失明で口元が腫れ上がった主人公の徐が「両眼失明」と書かれた募金箱を抱え、乗客をかき分けながら進んで行く。彼等は、「元日本軍在日韓国人傷痍軍人会」の面々である。総員17名は国会議事堂周辺の霞が関に地下鉄で出向く。

そして、俳優・声優の小松方正(1926-2003)による「戦後18年、この人たちは働くに職なく、外国人として日本の社会保障制度を十分受けられず、街頭募金をほとんど唯一の生計として日本の片隅に生きのびてきた。軍人恩給の支給から、韓国籍故に除外された時、この人たちの怒りと悲しみは極点に達した。この人たちは幾度も日本政府に向かって失われた体の一部の補償を訴えた」(大島, 1966)とのナレーションが流れる。首相官邸を陳情しようとしても相手にさせず、外務省、さらに駐日韓国代表部を訪れるが、外務省では「あなた方は韓国人だから韓国政府にお願いしてくれ」の一点張り。「韓国政府は、彼らが日本の支配下で動員された以上、補償の責任も日本にある」と門前払いである。「忘れられた皇軍」たちは、国家のはざまに捨て置かれた犠牲者にほかならない」(遠藤, 2014)との指摘はその通りであろう。

放送評論家の鈴木(2014)は、日本テレビプロデューサー牛山純一を評伝するなかで「忘れられた皇軍」を扱っている。ストーリーでは、上述の他、メンバーたちの酒宴と最後の海水浴場のシーンを扱った。海水浴場でレジャーを楽しむ日本人と戦傷を抱え続ける在日韓国人との対比を大島の演出と考えている。そして、小松のナレーション「怒気を含んだ口調で「日本人よ、私たちよ、これでいいのだろうか、これでいいのだろうか」という問いを突き付ける」を引用して番組紹介を終えている。

映画論の佐藤（2000）は、雑誌「ユリイカ」の大島渚特集に『『忘れられた皇軍』の泪』を寄せている。徐ら登場人物は「公式な場以外では、自分の立場を述べない。カメラにむかって意見を言うことはない。どこかカメラを避けている」。そして、ナレーションが「傷痕軍人の立場のほとんどもを説明するとともに大島の思いになっている」という。大島自身もこれらの傷痕軍人が在日コリアンだとは知らなかったという。

「在日韓人歴史資料館」が刊行した『100年のあかし』（姜・羅・李編，2010）にも「傷痕軍人」について以下の記載がある。「新宿の駅頭や上野の山で白衣に赤十字マークをつけ、戦闘帽子をかぶってアコーディオンを弾いたり軍歌をうたって「喜捨」を乞う傷痕軍人を記憶している人がいると思う。大島渚監督の「忘れられた皇軍」即ち朝鮮人戦傷兵のなれの果てである。どうして彼らがこのような物乞いをしたのか。それは朝鮮人への戦争責任を放棄した日本政府の姿勢と重なる。日本人として戦争に赴き、人生を無にした人々へのこの扱いこそ、解放後在日のもう一つの原点である」と述べられている。

2014年の再放送について、インターネットでは「日刊イオ「忘れられた皇軍」という衝撃」(<http://blog.goo.ne.jp/gekkan-io/e/5f56a1ef2fe42564e1ee7d3fa3b9fbff>)や「水島宏明 「日本人よ、これでいいのだろうか？」と日テレが放送した大島渚ドキュメンタリーの衝撃」」(http://www.huffingtonpost.jp/hiroaki-mizushima/nagisa-oshima_b_4592318.html)と題したブログがあり、それぞれ手短かにストーリーがまとめられているとともに著者の見解が記されている（2015年11月11日閲覧）。

筆者は、「韓国にとって、韓国の傷痕軍人とは、同じ民族が南北に別れて争った不幸な動乱の犠牲者のことをいうのである」という「忘れられた皇軍」でのナレーションが大変気になっていた。その点を確認することを含め、2015年11月上旬、筆者は韓国・ソウルを訪れ、韓国における傷痕軍人に関する現地調査を行った。韓国国会図書館および韓国国立中央図書館を訪れレファレンスサービスを利用し、傷痕軍人に関する資料照会したところ、戦前の日本統治下の資料は、牧村・辻村（1943）の『傷痕軍人労務補導』程度しか見られなかった。

また、ソウルに所在する「戦争博物館」では、日本でいう朝鮮戦争や38度線（軍事境界線・非武装地帯）に関する北朝鮮と韓国の軍事的緊張を扱った展示は見られたものの傷痕軍人に関するものはなく、戦争で犠牲となったと思われる片足の少年の写真1枚のみであった。日本語が堪能な韓国人大学教員2名、ソウル所在の大学で韓国人に日本語・日本文化の授業を担当した経験がある日本人教員2名に、このテレビ番組「忘れられた皇軍」や「朝鮮人日本兵」の存在について尋ねたが韓国で必ずしも知られているようには感じられないとの回答であった。

韓国人大学教員とは、むしろ、2015年8月、北朝鮮との非武装地帯の韓国側で北朝鮮が仕掛けたという地雷が爆発し、韓国軍兵士2名が負傷、2名とも足の切断が行われたこと、それに対する国家の補償が話題であった。

3. 戦後の恩給法廃止から身体障害者福祉法の制定へ

さて、敗戦後、日本政府や占領軍（連合国軍最高司令官総司令部:GHQ/SCAP）は傷痍軍人に対してどのような対応をおこなったのか整理していきたい。日本の戦後の社会福祉史を扱った著作には次のように述べられている。

「第二次世界大戦は、戦争犠牲者である傷痍軍人や戦災障害者を多く生み出しました。政府は、当時大量に放置されていた、これらの人々の早急の援助をせまられていました。しかし、傷痍軍人の保護救済を行うことは、旧軍人・軍属に対する優先的保護になり、占領軍の非軍事化、無差別平等に反することになる懸念がありました。政府は、当時大量に放置されていた傷痍軍人の早急の援助をせまられるなかで、占領軍の政策を尊重しながら、1949（昭和24）年12月、「身体障害者福祉法」を制定したのです」（鈴木、1996）。

「敗戦のもたらす結果として戦傷者の「名誉」の基盤は崩壊して、膨大な数の身体障害者だけが残った。しかし、非軍事化と無差別平等の原則が占領軍の強い指示である限りにおいて、旧傷痍軍人、戦災障害者だけに特別な対策を立てることはできなかった。戦後直ちに厚生省軍事保護院は廃止となり、1946年（昭和21）2月、大日本傷痍軍人会も解散した。……身体障害者福祉法は傷痍者保護対策への占領軍の強い指示である旧軍人・軍属に対する優先的保護の禁止を原則とせざるをえないために、傷痍軍人対策を身体障害者一般に及ぼして成立したものであるということができる」（高澤、1977）。

「戦後の身体障害者は、障害原因から傷痍軍人、戦災者、一般身体障害者の三つが挙げられる。占領軍の非軍事化と無差別平等の原則から、敗戦直後の身体障害者保護行政は、消極的にならざるを得なかった。……身体障害者福祉法の制定が遅れたのは、GHQの承認が遅れたこと、歴史的前提となる諸法を欠いたこと、行政当局も生活保護、児童福祉、身体障害者福祉の順で解決を考えていたからである」（吉田、1994）。

「当時 GHQ の非軍事化政策は徹底していて、たとえば傷痍軍人や軍人遺家族にかかわったことを行くと、軍法会議にかけるとされるほどであった。当時政府の把握している身体障害者は約49万人とされ、うち32万4,000人が退役傷痍軍人（66%）であり、PHW（公衆衛生福祉部）は政府の身体障害者プログラムを、「元軍人のニードに置き、……危険信号を意味する」と、否定的であった。このような動向に対して傷痍軍人たちを中心に多くの運動が起こったが、全国国立病院患者同盟（1947年結成）の運動を別にすれば、それは「白衣募金」であったり、半ば官制的な運動（日本盲人会連合－47年結成、全日本聾啞連盟－47年結成）にとどまり、「障害別のセクト性と他の障害への排他性を根強くもつという弱点があった」（河合、1981）。

これらから、ポイントは戦前からの「恩給法」の占領軍による廃止（1945年11月、軍人恩給等ノ停止ニ関スル覚書）とそのリカバー（1946年2月、恩給法ノ特例ニ関スル件）、その行き詰まりと新たな「身体障害者福祉法」制定（1949年12月）ということであろう。そして、

占領軍の徹底した非軍事化政策や無差別平等の社会保障の原則が、場面によっては傷痍軍人の就労・社会復帰を阻み、「白衣募金者」を生んだ具体的な背景と捉えられる。

もう一つ。「忘れられた皇軍」の登場人物が該当する「結局、在日コリアンの元傷痍軍人・軍属は、日韓どちらの政府からも何の補償も受けられないという最悪の立場に追い込まれることになったのである」（朴，2005）とはどういうことなののだろうか。日本の戦後の福祉政策と関連させ、制度史的論考（愼，2015）を参照しながら検討していきたい。

まず、この「戦傷病者戦没者遺族援護法」（昭和二十七年四月三十日法律第二百二十七号）を取り上げる。これには、

第一条 この法律は、軍人軍属等の公務上の負傷若しくは疾病又は死亡に関し、国家補償の精神に基き、軍人軍属等であつた者又はこれらの者の遺族を援護することを目的とする。

と述べられている。次いで、

・サンフランシスコ講和条約：1952年4月28日発効。

日本は朝鮮の独立を承認し、朝鮮に対する全ての権利、権限及び請求権の放棄（第2条（a））を行った。そして、敗戦からこの時点まで恩給を受けていた者は、日本国籍を取得しない限り、それを受けることができなくなった。

・日韓基本条約（日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約）：1965年6月22日署名。12月18日効力発生。

これによりこの時以降、朝鮮半島出身者は日本に帰化しても援護法の適用を受けることができなくなった。

・対日民間請求権補償法（対日民間請求権補償に関する法律）：1974年12月21日制定・施行。在日コリアンは支給の対象外であった。

上述のサンフランシスコ講和条約の発効から日韓基本条約効力発生の間に、「元日本軍在日朝鮮傷痍軍人会」は、タイプ印刷で日本語で記した「宣言」を出している。全文を掲げる。

「宣言 あの大太平洋（大東亜）戦争中、日本の為に銃を取り其の戦禍に巻きこまれ、不幸にして傷痍の身となり、今尚ほ異国の地にあるが、心は常に望郷の念にやまざるものがある。然し、現実には我々の戦傷病に対する保障を全く放置した。日本政府の非人道的な政策に因をなし、吾々の生活は悲惨と困窮のどん底にある。依って、茲に強固なる団結と相互扶助の精神に立脚して民主主義政治を謳歌する日本政府に対して、吾々の基本的人権の保障を強く要求する。又、吾々は自らが戦争の惨酷を知るが故に、常に平和を切望し、自由平等社会実現を忘れない。願わくば本運動に対し、諸賢の御理解ある御賛助を御願ひするものである
1957（昭和32）年4月」

これまでみてきた経緯から、日本人の軍人軍属は、戦後補償が復活した。それは日本国籍ではない在日コリアンからみると、「差別政策」に映る。そして、その根拠は「1952年4月、在日朝鮮人を無条件に日本国籍から排除するという法務省民事局長の一片の通達にあった」としている。日本人であれば「戦犯や戦死者、傷痍軍人が恩給や年金の支給を受け、旧満州残留「孤児」が国費によって帰国」した。

一方、在日コリアンの方は「大日本帝国の国策に従って「戦犯」となり、傷痍軍人となり、炭鉱夫を旧植民地出身者というだけで補償から外し、サハリンに放置するなど」であった。こうした「未解決の戦後処理問題が今も残る」のである。その様子は、韓国人元日本兵で右腕切断、左脚盲貫破片倉となった傷痍軍人、金（1995）の戦後補償を求める訴訟からも窺える。なお、金は「忘れられた皇軍」について「彼らの痛みはかつての私自身の痛みであり、現在の恨である。私は引き裂かれるような思いで、この映像を見入った」と述べている。また、本書によれば、「忘れられた皇軍」に登場する17名の「元日本軍在日韓国人傷痍軍人会」の内、15人が日本に帰化したという。

おわりに

本稿は、国家により徴用され、戦争という国家的行為により障害者となった傷痍軍人に焦点をあて、その特異性を検討したものである。筆者も就学以前から小学校低学年の頃の鮮明な記憶に、街頭テレビと「白衣募金者」がある。1960年代に入ってから1964年の東京オリンピックの少し前の頃である。あの金属製の装飾されていないストレートな義手は、現存する資料から作業用義手と思われるがその意味するところは不明であった。同時代の「鉄人28号」のイメージである。「白衣募金者」という呼称よりも当時から「傷痍軍人」の名の方を耳にしていた。

しかし、どうして軍帽、白衣、義手ないし義足でアコーディオンやギター、ハーモニカなどの楽器を奏で募金行為を行っているのか分からなかった。学校教育でも触れられなかった。それどころか、不快感を露わにする人をみたり、白衣募金者には「ニセモノ」が混じっているなどと云う事は耳にした。しかし、それ以降、社会的話題からも視野からも遠のいていった感がある。

今回、この研究に取り組む契機となったのは、いわば、偶然である。筆者は、日本学術振興会科学研究費補助金を得てアメリカ・ワシントン D.C. に所在するスミソニアン研究所で調査を行う機会を得た（溝口、2014）際、宿泊先から研究所へ向う途中、宿泊先の道路を渡ったところに「アメリカ傷痍軍人会国家サービス・法定本部」（溝口、2011）があった。週末に訪れてそこに居らしたアメリカ軍が関与した戦争により傷痍軍人となった方々と関わりを持つようになったことからである。

それを契機に改めて、文献調査を行うと、白衣募金者に関しては植野（2003、2004、2005）の一連の研究が、戦時中の傷痍軍人の職業保護についても山田（1997）の労作や金（2006）

や上田（2014）の論考が目に残った。じつは、すでに1951年に「傷痍軍人援護の実状 身体障害者福祉法ではこうする」と題した簡潔にまとめた記事が「東洋経済新報」に載せられている。

「軍国主義の犠牲者として、戦時中社会の同情を一身に集めた白衣の勇士達が、時と共に世間から忘れられつつある反面国家保護の不備に抗して、所謂白衣の街頭募金に進出し、一部には電車内での募金強要から世人に不快を与える面も出ている」とし、その原因を恩給が少な過ぎる、給付に軍隊時代の階級の差が設けられている、政府の職業斡旋がてぬるいという3点に帰着すると結論付けている。

「忘れられた皇軍」は、1963年の放映である。1951年からそれまでの間の12年間、「太平洋戦争中に日本軍に徴用され、負傷した在日コリアンの元軍人・軍属」（朴，2005）に、「日本人」だといって戦場に引っぱり出しておいて、今になって「朝鮮人」だから知らないんだと？」（遠藤，2014）という態度が監督大島渚の「怒り」として番組に結実したように思える。

本稿において傷痍軍人像の概略をとにかく浮き彫りにした。こうした傷痍軍人に対するリハビリテーション、社会復帰、就業、家族生活等々、どれも極めて重い問題群が控えている。リハビリテーションや社会復帰に戦前、戦中から使われていた義手、義足などの義肢について、その開発過程や使用状況、それが現在の障害者スポーツ・アダプテッド、テクノエイド論の源流としてどのように機能し展開をみせたのかについては今後の課題としたい。

本研究をすすめるに当たって、貴重な当時の資料の閲覧を許して頂いた「しょうけい館 戦傷病者資料館」（東京・九段）、「在日韓人歴史資料館」（東京・南麻布）に感謝致します。

本研究は立正大学社会福祉学部創立20周年記念研究プロジェクトの成果一環である。

文 献

- 遠藤正敬 2014 『忘れられた皇軍』が問いたすもの－日本が忘れ去ろうとしている「償い」，社会運動，410巻，39－44頁
- 姜徳相・羅基台・李美愛編 2010 『100年のあかし』，在日韓人歴史資料館
- 河合幸尾 1981 第2章 日本における社会福祉の展開『講座社会福祉2 社会福祉の歴史』（一番ヶ瀬康子・高島進編），有斐閣，85－86頁
- 金蘭九 2005 戦前・戦中期における傷痍軍人援護政策に関する研究－職業保護対策の日韓比較－，九州看護福祉大学紀要，7巻1号，45－57頁
- 金成寿 1995 『傷痍軍人 金成寿の「戦争」戦後補償を求める韓国人元日本兵』，社会批評社
- 熊谷市傷痍軍人会・同妻の会 1985 『創立30周年記念誌 戦傷』，熊谷市傷痍軍人会・同妻の会

- 牧村進・辻村康男 1945 『新版 傷痍軍人勤労補導』, 東洋書館
- 牧村進・辻村康男 1943 『傷痍軍人労務補導 労務管理全書第二十巻』, 東洋書館 (復刻版, 『戦前期社会事業基本文献集58』, 日本図書センター, 1997
- 美輪明宏 2015 疑問を持つことは真つ当です 悩みのるつぽ「朝日新聞」, 2015年12月19日付
- 溝口元 2011 アメリカ・ワシントン D.C. おける医療・福祉に関連した協会・博物館, 立正大学社会福祉研究所年報, 13号, 1-15頁
- 溝口元 2014 スミソニアン博物館学芸員スタネガーによる日本産両生類調査とその現存液浸標本 (付) 台北帝国大学旧蔵青木文一郎採集ネズミ科剥製標本, 生物学史研究, 91号, 87-114頁
- 大島渚 1966 8 忘れられた皇軍 テレビドキュメンタリー 1963年8月, 『日本の夜と霧 増補版』所収, 335-354頁, 現代思潮社
- 太田友重編 1943 『傷痍軍人提要』, 橋本商店
- 朴一 2005 在日旧軍人の怒り 『「在日コリアン」ってなんでんねん?』, 所収, 105-134頁, 講談社
- 埼玉県 1938 『傷痍軍人保護制度概要 埼玉県』, 埼玉県
- 埼玉県傷痍軍人会・埼玉県傷痍軍人妻の会 1993 『悠久平和の塔』, 埼玉県傷痍軍人会・埼玉県傷痍軍人妻の会
- 佐藤千広 2000 『忘れられた皇軍』の泪, ユリイカ, 32巻1号, 183-187頁
- 塩野林造 1967 「過去を顧みて」財団法人日本傷痍軍員会 『日本傷痍軍人会十五年史』所収, 466-467頁
- 愼 英弘 2015 朝鮮植民地支配と戦後の在日韓国・朝鮮人-同化主義と差別主義, 社会事業史研究, 48号, 45-61頁
- 鈴木嘉一, 2014 第十四回「忘れられた皇軍」の衝撃 テレビは男子一生の仕事 評伝・牛山純一, GALAC, 2014年8月号, 54-57頁
- 鈴木依子著・一番ヶ瀬康子監修 1996 『社会福祉のあゆみ-日本編-』, 一橋出版, 81-82頁
- 高澤武司 1977 13 敗戦と戦後社会福祉の成立, 『社会福祉の歴史 政策と運動の展開』(右田紀久恵・高澤武司・古川孝順編), 有斐閣, 272-273頁
- 東京経済新報, 傷痍軍人援護の実状 身体障害者福祉法ではこうする, 1951年5月12日号
- 上田早記子 2014 国立身体障害者更生指導所の入所事情-傷痍軍人の処遇を中心に-, 四天王寺大学大学院研究論集, 8号, 107-130頁
- 植野真澄 2003 白衣募金者一掃運動に見る傷痍軍人の戦後, 大阪大学日本学報, 22号, 95-116頁
- 植野真澄 2004 占領下日本の再軍備反対論と傷痍軍人問題-左派政党機関紙に見る白衣

「傷痍軍人」考（溝口）

の傷痍軍人，大原社会問題研究所雑誌，550・551号，1－16頁

植野真澄 2005 「白衣募金者」とは誰か－厚生省全国実態調査に見る傷痍軍人の戦後，待
兼山論叢日本学編，39号，31－59頁

(財)埼玉県遺族連合会・(財)埼玉県傷痍軍人会・埼玉県軍恩連盟 1995 『終戦五十周年記念誌
想いあらたに』，(財)埼玉県遺族連合会・(財)埼玉県傷痍軍人会・埼玉県軍恩連盟

山田明 1997 わが国傷痍軍人問題と職業保護の歴史，『戦前期社会事業基本文献58 傷痍
軍人労務補導』（牧村進・辻村康男著）所収，解説1－55頁，日本図書センター

吉田久一 1994 『日本社会事業の歴史 全訂版』，勁草書房，176頁

財団法人埼玉県傷痍軍人会・埼玉県傷痍軍人妻の会編 1995 『終戦五十周年記念誌』，財
団法人埼玉県傷痍軍人会・埼玉県傷痍軍人妻の会